

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(50) 平成14年7月1日

幕末・明治初期の経済書(その4)

## 福沢諭吉 『民間経済録』(K086/12、331/132、330.4/7ク)

『民間経済録』は福沢諭吉が初めて著した経済書です。これ以前、福沢はチェンバーズ編の『Political Economy, for Use in Schools, and for Private Instruction』の前半部、ウェーランド著の『The Elements of Political Economy』の第4編第3章の公的消費論(福沢訳では収税論)を翻訳し、それぞれ『西洋事情外篇』(慶応4(1868)年刊行)と『西洋事情二篇』(明治3(1870)年刊行)に収録し出版しています。また、『西洋事情外篇』ではチェンバーズの後半部を訳し出さなかった理由として、神田孝平訳の『経済小学』(原著はウィリアム・エリス著『Outlines of Social Economy』)と内容がほぼ同じであることを挙げており、同書を読了していることがわかります。上記の外国語の経済書はいずれも古典派経済学のテキストです。幕末・明治期の啓蒙的知識人である福沢諭吉が、こうした輸入学問をどう捉え、展開したのかを知る手がかりのひとつとして『民間経済録』は興味深くあります。

『民間経済録』初篇は明治10(1877)年に刊行されました。その序には、ベストセラーとなった『学問のすゝめ』の刊行について唯一遺憾に思うのは「其毎編の所論、連絡なきが為に、或は読者の誤解を致す可きやの一事なり」であり、そのため初学者用に経済学のテキストを書くことにしたと記されています。また、学問が嫌いにならないように、世俗とかけ離れた内容を避け、字も文章もやさしく書いた、とあります。さらに、本文の各ページ上部には確認用の小問が多く用意されていて、復習しやすいように、学習者の立場に立った工夫がなされています。

『民間経済録』初篇は10章から構成されます。「第3章 儉約の事」「第4章 正直の事」「第5章 勉強の事」などは、一見、経済理論とは関係のない項目のように思われますが、福沢は「経済に大切なものは、智恵と儉約と正直と、此三箇条なり」と考え、経済活動においてこれらの徳目が重要であることを説明しています。「第6章 通用貨幣の事」には面白い例話が使われています。滑川に落とした10文の銭を拾うために50文の賃金を払って人足を雇った青砥左衛門の話です(この話は『太平記』の巻第35に書かれており、『太平記』では50文を払い、銭を探すためのたいまつを買っています)。福沢はこれを40文の社会的損である、と断じていますが、1930年代に登場するケインズ経済学では、この行為は有効需要を創出するので社会にとって有益となります。第9章、第10章では政府や租税のことが書かれています。『民間経済録』初篇が刊行された明治10(1877)年は西南戦争が勃発し、政治的にも経済的にも混乱をした時代です。こうした状況の中で福沢は火付盗賊など具体例を示しながら治安、司法、国防、外交など政府の役割と必要性をわかりやすく解説しています。そして、「僅かに租税を払ふて一国に政治の仕組を設け、幾千万の人民が日夜出入共に身の安心を買ふは、価の高きものと云う可らず」と述べ、政府の財政的基盤として租税の重要性を指摘しています。

15、6歳の初学者を対象に書かれた『民間経済録』初篇の続編として、明治13(1880)年に『民間経済録』二篇(330.4/7ク 当館所蔵は明治14年刊)が刊行されます。初篇が家計を中心に据えた身近な家庭経済学であったのに対し、二篇は、初篇を学習した18、9歳を読者に想定し、保険、銀行、運輸交通、公共事業、国家財政など、より視野の広い公共経済学、社会経済学が講じられています。

### 【参考文献】

『福沢諭吉の経済思想』(331.2/173)

『福沢諭吉全集』第4巻(081.6/フ1)